

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2873400762		
法人名	宝寿会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホーム ゆうゆう		
所在地	兵庫県神崎郡神河町福本字中茶屋山1241-3		
自己評価作成日	平成24年 8月 29日	評価結果市町村受理日	2012年11月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.hyogo-kai.go.com/
----------	-------------------------------------------------------------------------

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人福祉市民ネット・川西		
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104		
訪問調査日	2012年9月18日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・自然豊かで、四季の移り変わりが感じられる静かな環境に、恵まれている ・季節感を感じるような献立を工夫している ・音楽ボランティアによる歌唱やリハビリ体操など、楽しく身体を動かす時間を設けている ・入居者の誕生日には、希望の食事と、手作りケーキでお祝いする。 ・職員の入れ替わりが少なく、入居者との間になじみの関係が生まれている ・併設の特養との交流や、行事参加がある

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>神河町の高台に位置し、同一敷地内に母体法人の特別養護老人ホーム等があり、利用者同士の行事参加、専門職の協力、合同の職員研修等、幅広い活動が行える環境である。利用者は、毎朝のラジオ体操とリハビリ体操、調理を日課とし、自由な時間は共有空間のジュークボックスから流れる懐かしい歌謡曲を楽しんだりしている。昼食時、利用者が巻かれた巻きずしを食べながら「私が巻いたんやっただかなあ」等、穏やかな会話がより食事時間を楽しくしていた。事業所では、利用者、家族の意向に沿った看取り介護を行うことができ、地域から災害時の協力の声かけがある等、グループホームに求められている課題を少しずつ解決することができている。今後、施設や職員待遇、職員のことば遣い等を利用者本位の視点から検討され、さらに、よりよいホームを目指していただきたい。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「入居者が、職員と共に楽しみを持ち、自分らしく暮らせるホームを目指します」と言う理念のもと職員との関わりの中で、ささやかでも楽しみごとがあり、一人ひとりの暮らしが実現できるよう、日々努力している。	職員は地域との関わりを認識し、そのために地域との相互交流の機会をさらに広げ、開かれたホームを目指そうとしている。職員と利用者の信頼関係も少しずつ深まりつつある。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	町の文化祭に入居者が作り上げた作品を出品し、見学に行っている。地域の美化デー(年2回)職員が参加している。地域で運動量を競い合う、チャレンジデーにも参加している。	利用者の手作り作品出品、地域行事への参加は定例となっており、利用者の楽しみとなっている。高校生のボランティア授業、実習体験、見学等も積極的に受け入れている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地元高校のボランティア実践授業や介護体験の実習生を受け入れているが、地域へ向けての活動は行えていない。民生委員の視察見学は二件受け入れ、質疑応答を行なった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二カ月に一度、行なっている。月々の行事、入居者の状況、入退院の報告、意見交換を行っている。また、昼食会や餅付きを兼ねて会議を行い、入居者の様子を見てもらっている。	区長、民生委員、地域包括職員、家族、利用者が出席メンバーである。利用者の普段のホームでの様子を中心に、映像や写真等で伝えている。地域の情報を得ながら、ホームとして利用者が地域とつながるためにできることは何か、意見交換している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には、必ず市町村担当者に出席して頂いている。困難事例などの相談、対応についてのアドバイス、助言を頂いている。	事務連絡以外にも、相互で情報提供を行っている。気軽に相談しやすい関係といえる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	宝寿会全体で身体拘束をしない方針であり、職員研修、及びホーム会議でも職員間で話し合い確認している。玄関の施錠については、ホーム横が急な坂道であり、安全面を考慮し施錠している	法人内研修だけでなく、ホーム会議等で職員間での意識統一を図り、必要に応じて勉強会も行っている。玄関の施錠については、やむをえず安全面を優先している。	家族へのリスクについての理解、納得も含め、施錠の状態化について、継続して検討を重ねていただきたい。
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止マニュアルを備えている。日頃から、入居者の身体の変化や対応の仕方について、職員同士で確認し合い、注意し合っている。	法人内研修により、虐待の定義、具体的事例などについてグループワークを行い事例検討を行っている。職員個々の気づきを通して確認し合うことで周知を図るようにしている。管理者とリーダーは相互に連携しながら、各職員と個別に話しを聞く機会を設けている。	

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	パンフレット等で勉強を行い、日常生活自立支援事業については、資料を読んだ、学んでいる。	パンフレット等資料の整備はしている。成年後見制度についての理解、学びの機会についてはまだ不十分といえる。	認知症の理解、啓発のためにも、必要と思われるので、職員への周知にも努められたい。
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入退去時には本人とその家族に十分説明を行い、相談などにはアドバイスをを行っている。	本人、家族に不安が無いよう、わかりやすい説明を心がけている。体験入所は、部屋の空き状況に応じ2泊3日まで可能としている。本人ができるだけ納得に近い形で利用してもらえるよう努めている。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には、入居者及び家族に参加していただき、意見や要望をだせる様にしている。家族の訪問時には、職員の方から話をしながら、意見が出やすい様に配慮している。	来訪家族については限定されるが、頻度は多い。年2回の家族懇談会を持ち、個別に家族と話しをしている。利用者の様子についてこちらから伝えることで、話しやすい雰囲気づくりに努めている。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ホーム会議に、法人の施設長が参加する機会があり。会議では、職員の意見や提案が出せるようにしている。購入伺い書で必要物品の購入や催しの提案をし、説明の上提出している。	ホーム会議で、半年に1回施設長も参加する機会があり、職員と直接意見交換できる。個々の職員の特性を活かすことができるよう、職員の要望も参考にしながら、適材適所に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	・管理者及び職員には年一回自己評価を行い、人事考課制度を導入している ・年一回、衣服費の支給 ・パート職への日曜出勤手当 ・交付金の支給		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	・月一回、特養での職員研修に参加している ・認知症実践研修、姫路リハビリテーションセンターでの研修、地域の介護施設交流勉強会、その他の外部研修に、職員が力に応じて参加する機会を設けている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域での介護施設交流勉強会での取り組みが「気付き」となり、入居者への支援方法の改善につながっている。グループホーム連絡会では、情報交換・事例検討入居者交流などを行っている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホームを見学して頂いたり、自宅への訪問をしたりして、御本人との事前面接などを行い、安心して頂ける様に努めている。アセスメントを確実に把握する。体験入居も行える。		
16			○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族との面接、話し合いを密に行い、家族の気持ちを理解し、又本人の気持ちも確認した上で、受け止めながら支援している。		
17			○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネージャーがいる場合は、連絡を取りながら、併設特養の申込も含め、必要としている支援を見極めるようにしている。		
18			○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	施設に入る以前の入居者の暮らしの中から、生活する上での知恵や方法を教えて頂き、ホームでもその事を活用した支援を心掛けている。(梅つけ、らっきょうつけ、柿の焼酎つけ、畑作りなど教えて頂く		
19			○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の思いや気持ちを十分にくみ取り、受け止めながら、出来るだけ家族との楽しい時間、思い出が出来る様に心がけ、支援している。(花見、バーベキュー大会、紅葉狩り、誕生会など)		
20	(11)		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	・地域の集まり(御大師さん、ふれあい喫茶、祭り等への参加) ・自宅近くの美容院への送迎	地元の集まりに友人と約束して一緒に出かけたり、お茶を飲みながら話しをするなど、地元住民との交流機会には積極的な支援に努めている。ボランティアとの交流も密になってきている。	
21			○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	生活を共有し合う中で、相手を思いやり、気遣う気持ち、又助け合う気持ちが自身の支えになっている。入居者同士の関係があまり良くない時は、職員が入り話をすることで落ち着かれ、自然に関わられる様に対応している。(世話役の入居者に上手く力を発揮出来る場面を作る。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22			○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	併設特養に移られた入居者に対しては、時々様子を観に行っている。又他施設及び自宅に戻られた方に対しては、ご本人の情報を詳しく伝え、問い合わせにも応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(12)		○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の生活の中で会話をする事で、本人の要望や意見、考えを聞き出している。又、それが困難な場合は、家族や近所の方に会い、思いを聞く事でその人らしい生活が出来る様に努めている	把握しにくい人については、利用者同士の会話やその時の様子から、気持ちを推し量るようにしている。また居室で、じっくり話しをすることを心がけている。家族や知人等から助言をもらうこともある。	
24			○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生い立ちや生活環境、家族関係等の把握に努めながら、ケアマネジャーから、情報収集し、プライバシーにも配慮しつつ本人や家族との良い関係が構築出来る様に心掛けている。		
25			○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活動作記録や、引き継ぎ帳に様子を記録し、全職員が入居者の状況を把握出来る様に努めている。又、朝、夕の引き継ぎ時、口頭で状況が理解出来る様に、補足している		
26	(13)		○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	第一に、本人の要望を聞き、家族の希望も取り入れながら、出来るだけ支援が行える事を考慮した上で、介護計画を作成している。	本人の好きなことや、楽しみとしていることを重視し、目標に向けて前向きな計画となるよう心がけている。利用者の日常の状態観察、把握等、職員間の共有については、十分とはいえない。	気づきノートのような記録帳を、職員間で工夫されてはどうだろうか。
27			○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	バイタルサインなど、身体の様子や日常生活における変化を記録し、より良いケアが出来る様に、職員間で話し合い、気がついた事、工夫出来る事は積極的に案を出して介護計画に活かせる様に努めている。		
28			○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	一人の人を支援に向けて、個別に(買い物)対応する事もあるが、他人居者を交えてグループ活動も行っている。又、その時のニーズに応じて柔軟な対応をする様に心掛けている。家族の都合により、病院受診が出来ない場合は、職員が付き添う様にしている。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	市町村との連絡を密に取り、民生委員やボランティア、区長などの力を借りて日頃から関係を深める働きを行っている。(運営推進会議、グループホーム連絡会、老人会の訪問等)		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者、又家族が希望し納得している医療機関を利用している。心身の変化について、相談出来る体制にある(併設特養の主治医、看護師)	入居時に希望のかかりつけ医を確認し、通院方法や受診結果の共有などについて利用者や家族と話し合っている。送迎は基本的には家族の協力を得ているが、職員が付き添うことも多く、医療機関との連携に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々のケアを通じて、早い段階で状態変化や異常に気づき、家族に連絡した上でかかりつけ医に相談しながら、一人一人の健康管理、及び受診を受けられる様に支援している。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合、病状によって家族を交えて話し合いや協力を医療機関に行っている。ホームでの生活状況、情報を提供している。入院中は時々病室訪問し、病状を把握する様にしている。	入院時は、利用者の安心のため状態に合わせて見舞いをし、病院関係者と連携を取るよう努めている。食事状態が落ち着いた段階で、医師や家族と話し合い、早期退院に結びつくよう支援している。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に、重度化した場合や終末期のあり方の意向を本人や家族から聴き、ホームでできる事、できない事を説明し、理解を得ている。併設特養への入所申し込みの説明も行っている。ただ、文書での取り交わしはまだである。	重度化や終末期ケアについて、事業所の対応可能なことを契約時に説明している。事業所としては看取りの経験はあるが、終末期ケアの方針に関し、利用者や家族と共有を図るための文書は作成していない。	終末期の対応は共通の課題とし、方針の統一を図るべく、利用者や家族と文書による意思確認を取りかわしておかれてはいかかがか。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急対応マニュアルを備えている。併設施設での職員研修に参加、応急手当が出来る様に取り組んでいる。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	併設特養と合同で年二回、消防職員指導のもと、昼夜を想定しての、消防訓練、避難訓練を行なっている。月一回の防災設備点検を行っている。地震・水害時の対応について、良い方法を検討中である。	年2回消防署立会いのもと、併設特別養護老人施設と合同の消火・避難訓練を、利用者も参加して実施している。立地的に地域住民の協力は期待できないので、運営推進会議でも話題とし、町担当課には地区自衛消防団の協力等に関して相談している。	事業所は山際に位置しているため、災害時の併設特養への避難を円滑に行うため、1階テラス及び2階ベランダからの平面的通路の設置が考えられる。

自己	者第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりのプライバシーを尊重し誇りを侵害しない様な言葉かけを徹底している。又、職員がプライバシー確保について、常に確認し合う様に心掛けている。	利用者個々のその人らしさを尊重した支援に留意し、誇りを損ねないような言葉かけに配慮している。職員は法人の接遇研修に参加し、日々の介護を振り返り職員会議で話し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の希望で地域への行事参加、買い物などには、行って頂くがなるべく本人の意思表示を示され、に引き出す様に取り組み支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来るだけ入居者のペースを大切にし、本人が望まれている事を引き出し、その人らしい暮らしが出来る様、支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	一人ひとりの個性、希望に応じて髪型、服装など身だしなみやおしゃれを個別に支援している。また本人の馴染みの美容院の利用など希望に合わせて支援している。愛用の化粧品を使用している入居者もいる。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節感を大切にしている。、好みを聞き、苦手な食べ物、嫌いな料理などは他の物に替えたり、目先を変えるなど工夫している。食事の準備、後片付けは、職員、利用者が一緒に行っている。	メニューは利用者の希望を聞き、季節感を取り入れて1週間ずつ職員が順に作成している。行事食、誕生日メニューなどは利用者の思い出話も尊重しながら決めている。畑から利用者とともに収穫した野菜を調理し、食事中に利用者から自然の恵みに感謝する言葉が出るなど、職員も同席の家族的な楽しい食事場面となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取・水分摂取量を記録し、把握している食事などで栄養摂取が不足している時は、補助栄養食品で補ったり、水分量が少ない利用者については、時間に関係なく水分補給に努める。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の口腔ケア、朝、特に夕食後の歯磨き、義歯洗浄など念入りに洗浄している。(ポリデント浸け、朝まで) 歯の無い方は、うがいをして頂き、口腔内の清潔保持に努める。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄時間を記録する事で、入居者一人一人の排泄パターンを把握している。本人がなるべく、トイレで排泄出来る様に支援している。又、排泄への不安や羞恥心に配慮している。	おしめの研修」に職員が参加・体験し、利用者の排泄自立に向けた支援に努めている。失禁パンツから布パンツになった利用者もあり、排泄の自立は利用者にとって自分自身を取り戻す機会であることを職員は意識し、日々の介護に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜を取り入れた調理の工夫や水分をできるだけ多く取るよう工夫し、身体を動かす様(洗濯物の取り入れ、掃除、エクササイズマシン)など出来る事をして頂いている。排便チェックで、排便サイクルを把握している。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人一人の希望や体調に合わせて、午後2時頃から、日常生活記録表を元に、入浴して頂いている。なるべく、本人の希望を取り入れ、ニーズに沿った支援を心掛けている。夜間は、職員の人数が少なくなるため行なっていない。	入浴は基本的に週3日で午後2時から5時と決めているが、夏季は毎日シャワーをする利用者もいる。特浴はないが、下肢筋力低下の利用者には、職員2人対応で安全にゆったりと入浴してもらっている。自力入浴の利用者には夜間入浴も検討したいと考えている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	入居者一人一人の睡眠パターンを把握(引き継ぎ帳の記録)夜、眠れない入居者には、一日の生活リズム作りを通した安眠帯を考え支援している。入居者によって、眠前薬利用も取り入れている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	日常動作記録表に記録する事により、薬の飲み忘れや誤薬を防ぐ様に、取り組んでいる。用法や用量についての理解は、服薬表を確認する事により、理解している		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホーム内で入居者一人一人が楽しみを見出せる様に、場面作りなどの支援を行っている。(テレビ番組、園芸、畑、生け花、食器洗い、掃除、洗濯たたみ、花壇の水遣り) 又、居室に自宅で使用していた物を置く事により、その人らしい生活ができるよう、支援している。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者一人一人の希望で、地域の行事に参加したり、又家族の協力で法事、結婚式、同窓会など、親戚の集まりに参加された。本人の思いに添い、墓参りや懐かしい場所、行きたい場所への外出支援を行っている。	地域の庚申詣りには、2か月に1回職員の送迎で参加している利用者がある。町立ホールで行われる映画鑑賞や歌謡ショーなどには希望者が参加し、知人の協力で同窓会や食事会に出かけている利用者もいる。また、お大師さん参りや墓参りには家族の協力の実現できている。	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望する入居者に限り、自分で財布を持ち、希望があれば職員が同行し買い物に行っている。 ・行事等の外出時は、ホームの立替にて適当な額の現金を持参し使えるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や大切な友人など電話をしたいと希望された時は、電話を出来る様に支援している(電話帳を提供する) 家族からの手紙、誕生カード、クリスマスカード、年賀状など楽しみにしている入居者もいる。		
52	(23)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間(玄関、廊下、居間、食堂、浴室、トイレなど)は入居者が居心地良く過ごせる様に生活感、季節感を取り入れている。花を飾ったり、壁の装飾物も季節毎変えている。空気清浄機をリビングに設置している。	天窓や大きなガラス戸により建物内は全体的に明るく、リビングには懐かしい家具などが置かれ家庭的な雰囲気である。玄関ホール、廊下やリビングにはたくさんの花が活けられ、利用者も花を見ながら季節の話をされていた。1階中庭の花には、利用者がリビングから直接出て自由に水を遣り育てている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用スペースの窓際にソファ、椅子、テーブルを設置し、思い思いの場所で過ごせる様に工夫している。又 畳スペースでは、テレビを置きいつでも見れる様にしている。寒い時期には、堀こたつでくつろいで頂ける様に支援している。中庭のベンチで過ごせるようにしている。		
54	(24)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・本人の使い慣れた家具、持ち物を置く事で居心地良い居室になっている。 ・孫、娘の写真など本人の目の位置に合わせて飾っている。	利用者の希望により半数近くが居室に畳を敷いている。ベッドや布団は好みに合わせているが、身体能力に応じての変更もありうる。自作の作品を飾るなどそれぞれ個性的な部屋となっている。家族と話し合い、できるだけ入居前の寝室に近い雰囲気となるよう配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・廊下、トイレ内、浴室内の手摺りにて、安全に歩行移動出来る様に配慮している。 ・入居者の活動意欲を引き出すような、馴染みの物品を用意し、本人の経験や状況に応じて行なっている。(ほうき、裁縫道具、園芸用品、趣味の品など)		